

グローバル時代において求められる 大学での学び

古河 幹夫

1. 大学の理念とグローバル化

大学の本分とは何か？ 社会が大きく変化するときや大学が改革の波に洗われるとき、繰り返し発せられる問いである。19世紀にオックスフォード大学で学問研究に邁進し1845年にカトリック教徒となった後、アイルランドのダブリンにあるカトリック系大学の初代学長に推挙されたニューマン（John Henry Newman）が行った講演集『大学の理念（The Idea of a University）』は、大学論の古典として今もよく取り上げられる。アメリカの神学・哲学領域を中心とする人文学研究者の大家の一人、ヤーロスラフ・ペリカンによるシカゴ大学創立100年を記念する連続講演も¹⁾、文字通り The Idea of the University と題され、ニューマンとの対話で一貫している。

ニューマンは、大学の本分は「知性の育成をその直接の目的とすることであり、また知性の教育に専心すること」²⁾だとし、当然ながらたんに知識の量的な増大といったものでなく、学生が学ぶという営みにおいて「学んだことをすでに知っていることと照合する時、その時、私たちは精神が成長し拡張しているのを感じる」と述べ、哲学的な考察力、総合的な判断力、真偽を見極める力の涵養をあげている。このようにして獲得される知

¹⁾ ヤーロスラフ・ペリカン『大学とは何か』法政大学出版局、1996年

²⁾ ニューマン『大学で何を学ぶか』大修館書店、1983年、p.43

識は、以後の大学論においてしばしば言及される「リベラルな知識」「リベラルな学芸・研究」であり、リベラルな知識とは「それ自体の要求に基づき、結果に左右されず、補足を一切期待せず、いかなる目的によっても鼓吹される、技術に吸収されるのを拒む」ような知識である。

リベラルアーツとしての教育を大学の課程の中でどのように位置づけるかという問いは、今日でも議論されているテーマである。それに劣らず重要なテーマが、教育は何の役にたつのかという、「有用性」「功利性」をめぐる問題である。ニューマンがこの講演を行った頃、すでに大学教育の目的は「功利性」原理にもとづくべきではないかという主張があり、「息子に商売をさせるつもりが、古代ローマ人の書物やラテン語を学ばせるために、学費と息子の時間を浪費するなどという、これ以上馬鹿げた話はあるだろうか」³⁾というジョン・ロックの有名な憤慨が、ニューマンの唱道する理念に向けられていた。ニューマンは教育の「有用性」を余計な配慮と考えていたわけではない。涵養された知性はそれ自体で善いもの、一つの「善」とみなし、善なるものはすべて「有用性」を備えているとの認識を披歴している。いわば紳士を育成する大学は、リベラルな教育を施すことによって、卒業する学生が社会のどのような分野に進もうと、そこで遭遇する諸活動に対処するのに必要な知的基盤と能力の訓練がなされている、という認識である。

科学研究による知識の進歩というもう一つの大学の使命については言及しなかったが、教育という点で今もなお大学人にインスピレーションを与え続けているニューマンの大学論の真髄である。今日の大学の状況を洞察している猪木武徳氏も、教養教育—とくに歴史の風雪に耐えて読み継がれてきた古典的書物を読み込み血肉化する知的訓練—の大切さを力説されている⁴⁾。

³⁾ 同上、p.96。ただし文言は少し変えてある。

⁴⁾ 猪木武徳『大学の反省』NTT出版、2009年

だが、現在の量的に拡大した大学とりわけ地方の比較的小規模な大学を念頭においた場合、ニューマンの説く大学の理念は当てはまるだろうか。まず大学の門をくぐる若者の資質と動機である。大学入学者が同世代人口に占める割合がかなり小さい段階は「エリート」時代、その後大学進学率が上昇し、大学は「マス」化する。進学率が50%になると「ユニバーサル」化と称される⁵⁾。2011年の我が国の大学進学率は53.9%である（学校基本調査）。このことはすでに大学の変質ともいべき変化を引き起こしている。大学を卒業する時点で同世代の半数が「大学卒」の学歴を有しており、高校生が進路選択を考えるさい、大学進学を選択に理由が求められるよりむしろ、大学に進学しない選択に理由が求められるような状況が出現している。加えて我が国における少子化と全体としての大学定員数に余裕がある状況がプラスされて、大学入学のハードルは随分と低くなっている。もちろん評価の高い難関校への入学は相対的には一層難しくなっているとも言える。ある大学関係者は、全国規模で受験勉強して有名国立大学へ進学する高校生が約5万人、ほとんど受験勉強をせず大学入学をはたす高校生が27万人と概算している⁶⁾。この後者の学生をかなりの部分引き受けている大学は、彼らがニューマン的な知性の涵養をめざす4年間の知的訓練に耐えるだけの覚悟と能力と条件を備えているか、冷静に考慮しなければならない。

一方で大学を無事に卒業した後待っている進路状況はどうであろうか。大卒の就職率について一般には7～8割という印象があるようだが、公表されているデータ－文部（科学）省と（厚生）労働省の「大学等卒業予定者の就職内定状況調査」－によれば、1996年度から2011年度まで（いずれも4月1日時点で）90%以上である。だが就職後3年以内の離職・転職率が30%台と言われるように、正規雇用というスタートは必ずしもその後の順調な人生設計の基礎とはならない。加えて社会・人文系の学部卒業者

⁵⁾ トロウ『高度情報社会の大学』玉川大学出版部、2000年

⁶⁾ 座談会「大学の課題を考える」『IDE現代の高等教育』2013年1月

の場合、認定された資格等が付与されるわけでもなく、学修した内容と就いた職業との関連性が、例えば医療・福祉系などと比べると小さいため、「エリート」段階に当然視された大学卒の学歴が与えてくれるインセンティブ効果は小さいのである。とはいえ、学歴の効用について国民のあいだで「高学歴であるにこしたことはない」という消極的なプラス評価が支配的であるとされ⁷⁾、大学卒業にともなう賃金の相違、4年間の時間と学習による人的能力形成が漠然とではあれ広く認識され、大学進学ユニバーサル化の趨勢が逆転する可能性は小さいと考えられる。

雇用の流動化、職業生活の不安定さという点に関してはグローバル化という変動の影響が大きい。ヒト、モノ、金の国境を越えた移動、世界の相互依存性の増大は多くの指標によって明らかである。ジュール・ヴェルヌが『八十日間世界一周』という裕福な独身貴族の人物の小説を書いたのは1872年であるが、主人公は全財産の半分2万ポンドを旅費に用意している。今や普通の若者がアルバイトで稼いだ百万円もあれば格安航空機を乗り継いで容易に世界一周の旅ができる。先進国の有力企業は生産と販売のネットワークを世界にもっている。財・サービスの取引でなく純粋に利益を目的としたマネーの動きは6倍の量にのぼる⁸⁾。

経済学は財・サービスの取引を人間の本性ととらえ人為的な制限がなければ、利益を求める動機を最大の推進力にして自由な交易・貿易はどこまでも拡大する傾向があると理解してきた。総じて自由な貿易の地球的規模での実現としてグローバル化を肯定的に当然の帰結ととらえている。事実判断として経済のグローバルゼーションとその帰結をどう理解するかについて専門家の見解は必ずしも一致しているわけではない。グローバリゼーションが社会、政治、文化に及ぼす影響まで考慮を広げるならば、グローバリゼーションの進展をどのように判断すべきか、価値判断まで踏み込むならば議論の幅は大きくなり、賛否の色合いは強くなる。ジョン・グレイ

7 濱中淳子『検証・学歴の効用』勁草書房、2013年。

8 ロバート・ギルピン『グローバル資本主義』東洋経済新報社、2001年、p.133

や佐伯啓思⁹⁾といった鋭い文明批評家は単眼的なグローバリゼーションの見方を強く戒めている。大学論との関連では少なくとも次の諸点を考察から省くことはできない。

第1に、現在進行中のグローバリゼーションは情報技術、通信技術の飛躍的な発展と相まって進展している点である。これは「情報化社会」「知識基盤社会」¹⁰⁾等として多くの紙幅が費やされているところであるが、知識の創造・加工、継承を主たる使命とする大学は現下の社会変動のフロントランナーとならざるを得ないということの意味する。

第2に、この技術的な変化に対応して、組織的・社会的にフラットな関係性、ネットワーク的な関係性の比重と意味合いが大きくなりつつあるという点である。

第3に、経済・政治の面では地球規模でのグローバリゼーションは、その変動中心がアジアへのシフトとオーバーラップして進行している点である。経済史の分野で500年を経た中国社会のヘゲモニー回復が注目されているが¹¹⁾、歴史的に中国文明を基盤に独自の発展をとげた日本社会は、近代化において欧米の価値観とシステムを首尾よく吸収・加工して今日の経済先進国の地位を築いたわけだが、このアジア・シフトのもつ意味を十分に理解していかなければならない。とくにアジア地域との交流に蓄積のある地方では、草の根での交流を基礎に等身大のアジア理解と日本のアイデンティティ確認を進めることができる条件がある。

第4に、数十年のタイムスパンで展望するさい、経済、資源・環境、宗教、政治等での大きな不確実性である。とくに国際的な金融とそれがもたらしうる影響については少なくない専門家が改革の処方箋を提出しているが、

9) ジョン・グレイ『グローバリズムという妄想』日本経済新聞社、1999年。佐伯啓思『アダム・スミスの誤算—幻想のグローバル資本主義』PHP新書、1999年、ダニ・ロドリック『グローバリゼーション・パラドクス』白水社、2013年など。

10) 知識基盤社会については「我が国の高等教育の将来像」中央教育審議会答申、平成17年。天野郁夫『大学改革を問い直す』慶應義塾大学出版会、2013年、また、アラン・バートン＝ジョーンズ『知識資本主義』日本経済新聞社、2001年

11) Kenneth Pomeranz, *The Great Divergence*, Princeton University Press, 2000

リーマンショック、ユーロ危機などに類する、これからも発生しうる不安要因は、個々人の人生設計を危ういものになっている。

スペインの哲学者オルテガは大学の使命についての論考のなかで、次のように述べている。「生は混沌であり、密林であり、紛糾である。人間は其中で迷う。しかし人間の精神は、この難破、喪失の思いに対抗して、密林の中に『通路』を、『道』を見出そうと努力する。すなわち、宇宙に関する明瞭にして確固たる理念を、事物と世界の本質に関する積極的な確信を見出そうと努力する。その諸理念の総体、ないし体系こそが、言葉の真の意味における教養〔文化〕である」¹²⁾と。この言葉が発せられたのは1930年であるが、不確実な21世紀に生きる我々にとって、確たる知の体系をもつことの意味を主張する言葉として、あたかも同時代の大学人によって発せられたかのようですらある。時代や形態や課題こそ違い、この理念を引き継ぐ知の共同体こそが「大学」であると思われる。

2. 「人間力」－涵養すべき能力と人間観

教育界において1990年代末から新しい学力観についての議論は初等中等教育における学力低下をめぐる論争とつながっていた。市川伸一氏によれば学力問題の議論において、学力には「学んだ力としての学力」と「学ぶ力としての学力」があること、そして学力をどう測定するのか、測定は可能なのかという論点を中心にあったという¹³⁾。

学習意欲、知的好奇心、コミュニケーション力、持続力といった「意欲系」「伝達系」をも基礎的な学力として把握する動きは、政府関連組織や産業界における教育・人材育成理念とも呼応し、中央教育審議会の「生きる力」、人間力戦略研究会の「人間力」、経団連・日経連の産業界が求める人材像、経済産業省の「社会人基礎力」と、90年代末から2000年代前

¹²⁾ オルテガ・イ・ガセット『大学の使命』玉川大学出版部、1996年、p.23

¹³⁾ 市川伸一『学力から人間力へ』教育出版、2003年

半にかけて、育成すべき人間像として提言が続くことになる。

図表1 学力をどうとらえるか

	測りやすい力	測りにくい力
学んだ力	知識 (狭義の) 技能	読解力、論述力 討論力、批判的思考力 問題解決力、追究力
学ぶ力		学習意欲、知的好奇心 学習計画力、学習方法 集中力、持続力 (教わる、教え合う、学び合うときの) コミュニケーション力

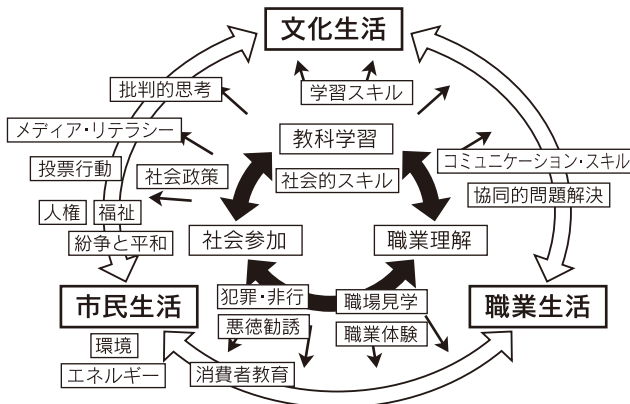
市川伸一『学力から人間力へ』教育出版、2003年、p.12

人材育成の新たな理念

- 1996年 「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について
—子供に「生きる力」と「ゆとり」を— (中教審答申)
- 2002年 「人間力戦略研究会」
- 2004年 「21世紀を生き抜く次世代育成のための提言」
(経団連・日経連)
- 2006年 「社会人基礎力」 (経済産業省)

「人間力」については、職業生活、市民生活、文化生活という一般市民がかかわる3つの活動領域において必要な能力を見直そうというものである(図表2)。産業界は、1996年に提言された「創造的人材」と同様に「与えられた知識だけに頼るのではなく、ものごとの本質をつかみ、課題を設定し、自ら行動することによってその課題を解決していける人材」の育成を謳い、求める3つの力として「志と力」、「行動力」、「知力」をあげている。「社会人基礎力」はこれら一連の提言のなかでもっとも流布したコンセプトであると思われるが、卒業時点で必要と思われる「基礎学力」「専門知識」と並び「社会人基礎力」を位置づけ、「前に踏み出す力」「考え抜

図表2 人間形成モデル



市川伸一『学力から人間力へ』教育出版、2003年、p.18

く力」「チームで働く力」の3要素から成る。これらの提言で目指されている能力は汎用的なものであり、古典的な大学理念であったリベラル・アーツ教育の現代的形態とも言える¹⁴⁾。

提唱する団体によって名称は異なるがそれらは相似的であり、「有名大学→有名大企業」の人生コースを目標に高等学校までの教育において、それなりの動機づけと獲得すべき能力として機能していた教育目標より範囲が広くなり、かつ重点が異なっている。本田由紀氏はこれを「近代型能力」と対比して「ポスト近代型能力」と特徴づけ、メリトクラシーの強化・深化として把握している¹⁵⁾。

14 「もともとのリベラル・アーツ教育が目指していたものは、むしろここでいう基礎能力と、それを統合する論理の形成であったのではないだろうか」金子元久『大学の教育力』ちくま新書、2007年、p.147

15 本田由紀『多元化する能力と日本社会』NTT出版、2005年。メリトクラシーについては、マイケル・ヤング『メリトクラシー』至誠堂、1982年、R.P.ドーア『学歴社会 新しい文明病』岩波書店、1998年を参照。

図表3 「近代型能力」と「ポスト近代型能力」の特徴

「近代型能力」	「ポスト近代型能力」
「基礎学力」	「生きる力」
標準性	多様性・新奇性
知識量、知的操作の速度	意欲、創造性
共通尺度で比較可能	個別性・個性
順応性	能動性
協調性、同質性	ネットワーク形成力、交渉力

本田由紀『多元化する能力と日本社会』NTT出版、2005年、p.22

メリトクラシーは近代社会において地位・職業等に人という資源を配分する主要な原理である。それは理想的な形では成果に対する「貢献に応じた分配」の原理に対応するもので、成果産出の刺激（効率性）と分配の妥当性（公平性）についての人々の観念にも合致する。しかし企業レベルで「業績主義」や「成果主義」という形で報酬や処遇の方針に具体化される段階では、小さくない懸念も生んでいる。熊沢誠氏は労働現場にも詳しい研究者であるが、個々の職場で「成果主義」原則を労働者たちの納得を重ねてルール化していくことの大切さを説いている¹⁶⁾。

メリトクラシーには当然ながら「競争」の要素がある。「機会の均等」という原則と、明示的あるいは暗黙的にペアで考えられるならば、その競争は公正かつ公平である。メリトクラシーの下での競争は、スポーツ競技における競い合いに喩えられてイメージされるなら、その競争にネガティブな反応をしたり、まして拒絶する理由はないように思われる。しかし、ある大学教育関係者から「競争以外に承認への動機づけを私たちの社会は若い世代に与えられていない」¹⁷⁾と嘆息が聞かれるとすれば、どうしてなのだろうか。

思うに、競争が競い合う者たちの潜在的な能力を引き出す重要な仕組みであることは、スポーツ競技などで明らかである。しかし人生をスポーツ

¹⁶⁾ 熊沢誠『能力主義と企業社会』岩波新書、1997年

¹⁷⁾ 武田徹『実用教育の場から若者の承認欲求を満たす場へ』『中央公論』2012年2月号

競技の比喩によって理解できるのはその部分にすぎない。スポーツ競技は繰り返しやり直しが可能であり、スタートラインは競技者すべてにとって平等である。運・偶然性の要素を前提にしたうえで競技者は努力と技能を競うのである。一方、人生というゲームは、いわゆるやり直しと呼ばれる再チャレンジが不可能ではないが、ゲームの勝敗とその賞金が次のゲームに引き継がれる累積的な、一回きりの過程である。スタートラインとは言えば、スポーツにおけるがごとく白い真っ直ぐのラインではない。このように論じると、社会的な公正を展開したロールズの正義論のテーマに踏込むことになる。ロールズは社会制度が正義に適っているための条件を省察し、平等な自由と機会均等が保障されることを社会的な正義の条件として設定したが、それだけでは不十分と考えた。「格差原理」という条件を付け加えている。すなわち、〈社会的・経済的な不平等は最も恵まれない人々にとって利益になる範囲内でのみ社会的に容認できる〉、という条件である。これは社会というものを、構成員が各々の人生計画の下、自由に幸福追求をするうえで従うべき協同と連帯の仕組みである（べき）、とみなす彼の観念が基礎になっている。競争の原理は社会的な正義の原理の下にあるべきなのである。

フランク・ナイトは、欲求充足の手段を効率的に産出する市場経済という仕組みには、もう一つの側面としての、一種の競争的ゲームとみなしうる経済生活という性質があるとして、競争の倫理を思索した。彼は、市場経済が産出するのに成功してきた財が、人間にとって有する質的側面、競争的秩序が生み出す人間類型、パーソナリティについての判断が必要であると述べる。「社会秩序は、一般にその構成員の欲望を充足するだけでなく、欲望の対象も創造する。それゆえ当然の帰結だが、社会秩序に関する倫理的判断は、その秩序が現行の欲望をどのくらい効率的に充足しているかよりも、その秩序がどのような欲望を生み出し、人々のなかにどのような気質を育むか、ということに基づいて下されなければならない¹⁸⁾」。競争的

¹⁸⁾ フランク・ナイト『競争の倫理』ミネルヴァ書房、2009年、p.16

ゲームが熱をおびると、そのゲームに勝つことそれ自体が目的となり、そのゲームの目的、賞杯は何なのかということが往々にして見失われると危惧する。「動機としての競争を正当化する根拠」は「人としての人間に本来的な価値があるとするアリストテレス流の善なるものの概念化、あるいはプラトン流の範型としての善のアイデアというもののなかに見出すことは不可能だ」と言う。

今日のユニバーサル化した大学において「人間力」や「社会人基礎力」の養成が期待され、その重要な要素としては道徳観、倫理観も含まれている。つまり自然界や社会についての客観的認識の増進とならんで、そこに生きる人間行動、人間心理などについても適切な教育が施されることが求められている。生きる意味、人間の尊厳、「善き生」といった哲学的テーマにつながる事柄である。大学教員がすべて哲学や倫理学について必要な知的訓練を受けているとは想定できないが、かつての「エリート」段階にあった大学では、授業だけでないキャンパス生活全般で、学生が相互にそのような議論や問いかけを行う場面が十分にあった。今日の大学においてそのような場面や問いかけの学問的関連度は薄くなっているかもしれないが、人生哲学にかかわる対話は交わされている。

功利主義と人間観について言及しておこう。なぜなら功利主義こそは、社会科学系の学部において、明示的ではないにしても暗黙のうちに伝えられている道徳メッセージの理論的基礎だからである。功利主義はベンサム及びJ.S.ミルによって古典的な表現を与えられているが、人間の快／苦を正しい行為の基準とし、意図よりも結果においてその行為の是非は判断され、個人にとっての善悪は「功利性」という共通尺度によって社会的に集計でき、社会的な価値判断の基準にもなる、という道徳論である。功利主義は、人間というものを快／苦を受容するうえで等しい存在と捉える点で人間平等論であり、古来の道徳論が特別の学識と訓練を要するエリートにのみ許される資質を称揚しがちであったのに対し、万人が従うことのできる道徳論を提供したという点で民主主義的であり、また生物的存在として

のヒトを浮かび上がらせたことによって、同じく快／苦の能力がある動物にまで道徳的配慮を拡張するといった進歩的側面をもっている。価値多元性と道徳相対主義の現代にあって、広く受け入れうる道徳理論が他にないとの理由で、公共政策における社会哲学論として、「最大多数の最大幸福」という命題を支える功利主義に賛成する人は少なくはない。

しかしながら、人間が感じる快という心理的な反応は実は異なる活動や状況から生じるものであるにもかかわらず、同一のカテゴリーで理解すべきものなのだろうか？ ギャンブルの興奮から感じる「快」とユーゴの『レミゼラブル』を読んで湧き起こる充足感からくる「快」は、質的に同じで量的にのみ異なる（よって集計が可能になる）と解釈してもいいのだろうか？ J.S.ミルはこの批判に気づいていて、欲求満足には質の違いがあることを認めている——ミルはこのことによって功利主義を修正したのか、功利主義を放擲せざるをえない程の大きな転換にならなかったのか等、研究者のあいだでは論争のテーマになってきた——。アルコール依存の傾向がある人が飲酒のさいに覚える「快」は、素面になって反省する心理的な「苦」とどう折り合うのか。マラソン競技は身体的には強度の「苦」の連続であるが、なぜ人々は数時間も自らそれを経験しようとするのだろうか。完走を成し遂げてこそ感じ取れる達成感、精神的な「快」のためであろう。つまり一見すると誰にとっても異論のない人間の快／苦は、各々の人の「かくありたい自分」や人生目標と照らし合わせられるときにはじめて、行為の正しさ、適切さの判断の基礎になるのである¹⁹⁾。

近代（とくにヨーロッパ）は一つの間人像、つまり外部からの命令や要請に支配されず理性的に自らの欲望・感情や人生目標を判断できる、自律的な人間を範型としてきた。それは必ずしも現実的な人間像でなかったにしても、少なくとも一つの間理想となりうる像であった。普遍的で「原子論」

¹⁹⁾ 功利主義への賛否論は、A.K.Sen and B.Williams, *Utilitarianism and Beyond*, Cambridge University Press, 1982. 本稿はマックインタイア『美徳なき時代』みすず書房、1993年、の道徳論に依るところが大きい。

的な像である。また、経済学について言えば、個人の私的利益追求という動機を、決して道徳的に忌避すべき非難の対象ではなく、市場経済という仕組みにあっては、経済活動の刺激因として重要なものであり、社会秩序と対立するものでもないことを明らかにしてきた。マンデヴィルの『蜂の寓話』はややアイロニカルな書物であるが、アダム・スミスの『国富論』においても柱となっている認識である。

人間性に関する議論に終着点はないだろうが、発達心理学、進化生物学、脳科学等の発展をふまえて提出されてきた考え方には耳を傾ける価値があると思われる。「共感的人間 (Homo Empathicus)」²⁰⁾と称されるものである。共感 (empathy) という心の働きそのものは何ら目新しいものではない。しかし人間性の根幹をなす「知性」を狭く解釈された理性に限定するのではなく、情動的 (emotional) 知性²¹⁾、人間関係を認識するさいに働く「社会的知性」をも包含する、複合的なものと解釈する研究が増えてきている。共感への着目はアダム・スミスの『道徳情操論』においても広く知られるところであるが、共感こそは倫理の基礎であり、利己 (追求) の動機と総合して理解されねばならない。とくに18歳~21歳という社会観・人生観を形成するうえで重要な年代にある学生に対しては留意が必要であると思われる。もし「共感的人間」像が21世紀のネットワーク型社会に親和的であって、心理学的な基礎をもつ理論構成であるならば、道徳論の基礎になるだけでなく、教育方法もそれに適したものに变化すべきであろう。

道徳や人生哲学についての議論は、特定の講義によって知識を与えるよりも、演習等の対話型授業の場で、あるいは課外の諸活動のなかで、具体的な経験や対話のなかで成功裏に展開できるものではないだろうか。教育者と学習者がキャンパスという一つの共同体において、哲学的な深みのある対話を生き生きと展開できているかどうかが重要であろう。それこそが現代的な知性の涵養の作業である。

²⁰⁾ Jeremy Rifkin, *Empathic Civilization*, Polity Press, 2009

²¹⁾ ダニエル・ゴールマン『EQ—こころの知能指数』講談社、1998年

3. 地域性^{ローカリティ}と学びの深化

グローバリゼーションに対して「グローバル」すなわちグローバルに考えローカルに行動すると言われることがある。ここで「ローカル (地域性)」は、何故にグローバル化と相並ぶ意義を付与されるのだろうか。

第1に、グローバリゼーションにおいて頻度と範囲を増す人の出会いにおいて、出会うのは様々な文化的・伝統的背景をもち、生活スタイル・価値観の異なる人どうしである。価値判断的にとらえようとするならば、グローバリゼーションの本質は多様性にある。多様性を貯蔵しているのは、自然環境、歴史・伝統、生活慣習等において固有性をもつ諸地域の存在である²²⁾。

第2に、グローバリゼーションを基底因とする労働流動化や生活の個人主義化等により、経済と市民社会のバランスが崩れつつあるのではないかという懸念である。英米圏におけるソーシャル・キャピタル (社会関係資本) の劣化に警鐘を鳴らしたのはアメリカの政治学者パトナムである²³⁾。市民社会の形成においてコミュニティの存在は重要な柱である。現代におけるコミュニティは、村や近隣地域のような伝統的コミュニティから自発的結社にもとづくコミュニティや象徴的コミュニティまで、決して一様ではないが、地域社会は今なお豊かなコミュニティとしての伝統と営みを保持している。地域社会においてこそ、人はコミュニティの精神に触れることができる。

第3に、21世紀はエネルギー問題において、化石由来の石油、石炭、天然ガス等から再生可能エネルギーにシフトせざるを得ない時代である。石油の埋蔵確認量が40数年と推定され、現実に採掘している量の最大期である「ピークオイル」はすでに過ぎたと言われている。再生可能エネルギーは、自然条件の相違により地域ごとに産出・分配・利用の形は異なるも

²²⁾ 三澤勝衛『地域個性と地域力の探求』著作集1、農文協、2009年

²³⁾ パトナム『孤独なボウリング』柏書房、2006年

の、システムとしては分散的で、エネルギー消費者がエネルギー生産者にもなりうる可能性が萌芽的ではあれすでに現実化しつつある。リフキンはこれを「第3次産業革命²⁴⁾」と概念化し、イギリスが嚆矢となった産業革命（18世紀後半）にも匹敵する巨大な社会変動をもたらすと予想している。脱化石エネルギーは欧州が一步先を進んでいるが、そこから見えてくるのは、エネルギーを含め財・サービスの地域内循環の形成、それをめざす努力である²⁵⁾。市場経済を基盤にしつつも、マーケットエコノミーコミュニティビジネスや多様なNPOが豊かに展開する社会的経済でもある。ソーシャルエコノミー持続可能な成長の具体的な姿は、そのような地域内循環の形成においてこそ現実化するだろう。

多様性、コミュニティの精神、地域的な経済循環を実感をもって学ぶ点で、地方大学は都市部の大学にない相対的な利点がある。たとえば長崎は、江戸時代の鎖国状態において許された数少ない海外交易の窓口であった歴史から、異文化との遭遇や交流が色濃く残っている地域である。キリスト教の影響を日本のどこよりも強く受けた独自の歴史もある。近代初期の石炭業、造船業から水産業や陶磁器などの地場産業や観光業と、産業においても多彩な顔をもつ地域である。五島、壱岐、対馬、平戸など離島の多さも独自の多様性と課題を提示してきた。

長崎県立大学は、経済学部、国際情報学部、看護栄養学部の3学部から成る中規模公立大学であり、設立の理念から体験型、プロジェクト型学習の分野で様々な実践を積み重ねてきた。継続性のある取り組みとして、たとえば経済学部の「PIEES=The Program for Intercultural Education and English Studies」は米海軍基地のある佐世保の土地柄を生かした地域貢献活動を行うなかで英語力と異文化理解を深める取り組みをしている。近隣の小中学校で英語学習を補助したり、アメリカンスクールでのそろばん教室でサポート役を果たしている。看護栄養学部にある「クックベジ」とい

²⁴⁾ リフキン『第3次産業革命』インターシフト、2012年

²⁵⁾ 吉澤保幸『グローバル化の終わり、ローカルからののはじまり』経済界、2012年。藤井良広『金融NPO—新しいお金の流れをつくる』岩波新書、2007年

うサークルは学内に設けられた菜園で野菜を栽培し、そこで収穫した野菜を用いて大学所在地である長与町の幼児・小学生と保護者と料理を通じた交流を行ったり、長崎県や九州地域の食と農業に関する意見交換にも積極的に関わっている。国際情報学部の学生で活動する映像制作団体「Siebo」はNHK全国大学放送コンテストで何度も上位入賞する力量を有するが、長与町や大村市との連携で情報番組に関わったり、長崎に関するイベントで多くの制作依頼を受けている²⁶⁾。

筆者も長崎県の重要な地場産業である波佐見焼、三川内焼の知名度向上と販売促進のため、そしてそれを通して固有の伝統を見直し地域資源をより深く評価しようと、学生とともにアンケート活動や聞き取り、職人や若手アーティスト等との交流に携わり、その成果の一部は『波佐見の挑戦』（長崎新聞社）として刊行されるにいたった。

だが地域性とは局所的であり特殊でもある。地域性に関する認識はより広い関連性のなかで把握され、一般性、普遍性のなかに位置づけられる必要がある。学びには段階があることについて佐々木毅氏は『学ぶとはどういうことか』²⁷⁾の中で次のように述べている。まず知らなかった情報や知識を知る、記憶するという「知る」段階。次に「理解する」段階。原因と結果の関係に目配りしたり、物事の広範な構造に遡って事実とされているものを理解する。次に学習者に事実として提示されている知識や情報を「疑う」段階である。最後に、事実や現実に対置される新たな適切な可能性の追求がくる。佐々木氏はこれを「超える」段階と称する。

知を深さをもったものとして把握することは、学習理論における「深い学び」「浅い学び」においても重要なポイントである。学びの深化において、「知識を『正しい』か『誤り』か（二分法）と捉えるレベルから、研究結果に証拠がどのように使われるのかを認識するレベルへ、さらに、知識は

²⁶⁾ この3事例は長崎県立大学が2013年10月31日に公立大学協会と共同で開催した「大学評価ワークショップ」において紹介されたものである。

²⁷⁾ 佐々木毅『学ぶとはどういうことか』講談社、2012年

いまも発展し、挑戦に対して開かれていることを受け入れるレベルへ、最後は、不確かで、社会的に構成されるもの（相対主義）として認識するレベルに至る²⁸⁾。発展的な学習は、学生たちが自らのなかにもっている知的構造に働きかけ、新たな全体像を構築するように促す。「すぐれた教師たちは情報と考え方をしっかり記憶させるのは学習者が理解を構築するためだと思っている。・・・学生たちの考え方、行動の仕方、感じ方に持続的で実質的な影響を及ぼさない限り、学習はほとんど意味がないと考えているのである。²⁹⁾」

上述の体験型学習、プロジェクト型学習にあっては、「意欲系」において一定の条件が満たされており、それを「伝達系」「知識系」の学力へとつなげていくことが重要となる。一方で、教室で行われる講義や演習においても「深い学び」を達成するためには、双方向的なスタイルや学生参加、ディスカッション等の方法を一層導入することが必要であろう。

グローバル化がもたらす変化の速度と範囲は、過去に例を見ないものがあり、世界の変化を適切に認識することは容易ではない。膨大な情報が次から次へと生み出されるが、一方で知識の陳腐化のテンポも速い。哲学者ホワイトヘッドは、教育が成功するためには取り扱われる知識に常にある種の新鮮さが必要であると述べている³⁰⁾。この忠告は現代において一層よくあてはまる。時を経ても変わらぬ不易と変わりゆくものとの見極めが教育者には求められる。

28 ノエル・アントウイスル『学生の理解を重視する大学授業』玉川大学出版部、2010年、p.40

29 同上、p.126

30 ホワイトヘッド『教育の目的』著作集、第9巻、松籟社、1986年、p.138。「知識は魚と同じように新鮮なまま保つことはできません」